

プロサッカー選手の人生の転換期に関する一考察 — ZINEDINE ZIDANEと中田英寿の引退について考える —

鎌 田 道 彦

プロスポーツを職業にする人間の職業期間は短く、引退することによって第二の人生の選択を迫られる。今年度引退を行ったZINEDINE ZIDANEと中田英寿の両プロサッカー選手の引退エピソードについて考えた結果、両者とも体力的な衰えの要因は認められ、自分のイメージと実際のプレーとのズレが本人に不全感を生じさせていた。そして、このプロセスをプロサッカー選手としてのアイデンティティの混乱や危機として捉えることができた。この解決法として、プロサッカーを引退するプロセスを通じて、イメージと身体のズレを受け入れることによって、この危機に適応していけると考えられる。そのために、この引退の時期というものを自覚しつつ、サッカー以外の面での自己理解の促進や将来のビジョンの確立が重要と考えられる。今後、引退問題に対してカウンセラーの導入など、サポートシステムを充実していくことの重要性が示唆された

キーワード：プロサッカー選手、現役引退、アイデンティティの危機

1. はじめに

2006年7月、FIFA World Cup2006終了後、フランスまたは世界に渡る大きな出来事があった。フランスサッカー界をこの10年間支えてきたZINEDINE YAZID ZIDANE (以下、ZIDANE) が現役プロサッカー選手から引退した。ZIDANEは20世紀のフットボーラーの中でも歴史に残る人物であり、フランスだけでなく、世界中で注目され、愛されてきた選手である。そのZIDANEの引退は世界中の人々にショックを与えた。彼の技術をもってすれば、まだまだ現役選手を継続できた状況の中での引退であったため、心残りな方は多いと思う。同じく日本サッカー界の発展に貢献してきた中田英寿 (以下、中田) も引退を行った。中田の引退においても同じく日本人の中にも同じような疑問を感じている方は多いと思う。そこで、神田橋 (2006) が人間には起こっている事態について一応のストーリーを作ることで、事態を落ち着かせる傾向があることを述べており、本論においても何か納得のいくストーリー付けを行いたい。

ZIDANEは34歳での引退、中田は29歳での引退であった。二人とも、発達心理学的に言えば青年期後期にあたり、中年期を迎える前の段階である。岡本 (1997) は中年期を危機期として述べており、この中年期はライフサイクルの中で大きな転換期であるとする見方が注目されてきている。中年期は生物学的にも、社会的、心理学的にも、また家族の発達の側面から見ても、変化の多い時期である。岡本 (1997) は、身体的には体力の衰えを感じ始め、職業的には自分の能力や地位の拡大に限界が見え始める時であり、さらにまた、若い頃に設定した自分の「人生の夢」とその達成度について、改めて問い直される時期であることを挙げている。

この中年期の危機は、プロスポーツ選手の引退の時期と重なると考えられる。プロスポーツを職業にする人間の職業期間は、他の職業に比べると非常に短い。これは、怪我での引退を除けば、中年期を迎えるにあたり、体力的な衰えが決定的な要因であると考えられる。自他ともに求められるパフォーマンスを遂行できずに引退を決意することに至る。そして引退することによって第二の人生の選択を迫られる。これは、一般企業でいえば、中年期には多くの者が管理職に移行し、職場での役割が変わったりなどするが、プロスポーツ選手においてはまだ中年期の期間を残している上に、引退となれば老年期に退職した際に今後の生き方を問われる位置と同じであり、かなり深刻な危機であると考えられる。人生経験もまだ浅い時期に大きな次の人生を決断するプロスポーツ選手はこの危機をどのように乗り越えるだろうか。サッカーは世界で一番盛んなスポーツであり、プロ選手の人口も世界一であるため大きな問題にもなる。本論ではプロサッカー選手の引退の要因は各人に応じて様々であるが、今年度引退を行ったZIDANEと中田、両選手の引退エピソードから考えることを行う。その中でプロサッカー界全体の引退の問題にも触れたい。

2. エピソード I : ZINEDINE YAZID ZIDANE

(1) ZIDANEのサッカー人生

ZIDANEのサッカー人生について竹谷 (2006)、サッカーベストシーン (2006) を中心に以下にまとめる。表1にZIDANEのプロフィールを示す。ZIDANEの両親は、1950年にアルジェリアからフランスへとやってきた。ZIDANEが最初にボールを蹴り始めたのは、マルセイユ北部に位置するカステラーヌ地区にあるアスファルトのタルタヌ広場だった。そこでテクニックを磨き、元祖ZIDANEの技である“マルセイユ・ルーレット”もこの時期に完成された。11歳になるとスポール・オリンピック・ドゥ・セプテム・レ・バロンに加入し、公式試合に出場できるようになる。1986年、14歳でマルセイユを離れ、カンヌでプロデビューを果たす。チームの練習の後も一人で練習を続けた。トップチームでのデビューは16歳であった。カンヌが2部落ちしたこともあり、1992-93シーズンにボルドーへ移籍した。1994年8月17日、対チェコ戦で初の代表デビューをし、0-2から2-2に追いつく2得点を挙げている。さらに1995-96シーズンUEFA (Union of European Football Associations) カップで準優勝を果たし、ZIDANEの知名度はヨーロッパ全土に広がった。

UEFAカップでの活躍もあり、1996-97シーズンにイタリア・セリエAの名門、ユベントスに移籍を果たす。1996年にZIDANEはクラブ世界選手権 (トヨタカップ) にて来日している。その時にクラブ世界一という初のタイトルを獲得する。さらに相手チームのリーベル・プレート (アルゼンチン) にはZIDANEのマルセイユで憧れであったエンソ・フランチェスコリがいた。試合終了後に真っ先に駆け寄り、フランチェスコリのユニフォームを手に入れた。その時は試合以上に緊張したとのこと。1996-97シーズンは、まだチームにフィットしていな中、リーグ優勝・トヨタカップ・欧州スーパーカップ・チャンピオンズリーグ準優勝を果たした。1996年はイングランドにてEURO96が開催、フランス代表はベスト4であった。1997-98シーズンは、リーグ優勝を成し遂げたもの、2年連続でチャンピオンズリーグ制覇を逃している。1998年はZIDANEにとっては特別な年である。自国で迎えたワールドカップ1998では、予選リーグで退場劇を起こすものの、チームもZIDANEも持ち直し、決勝では自ら2ゴールを挙げ、念願のワールドカップ初優勝を果たした。この年にFIFA (Federation International de Football Association) 世界最優秀選手とバロンドール (欧州最優秀選手) を受賞した。一方で1998-99シー

表1. ZINEDINE YAZID ZIDANE プロフィール

	1972年6月23日生
	フランス・マルセイユ出身
1988年	フランス・リーグ1 カンヌ 入団
1992年	同 ボルドー 移籍
1996年	イタリア・セリエA ユベントス 移籍
2001年	スペイン・リーガエスパニョーラ レアル・マドリード 移籍
リーグ1 通算	222 試合出場 37 得点
セリエA 通算	190 試合出場 29 得点
リーガエスパニョーラ通算	202 試合出場 36 得点
国際A マッチ通算	108 試合出場 31 得点

ズンは、リーグでは冴えず、チームは7位で終わる。1999-00シーズンはリーグ2位の結果であった。2000年にはベルギー・オランダでの共同開催によるEURO2000が開催された。この大会でもフランスは優勝し、フランスに二度目の栄冠をもたらした。この年は2度目のFIFA世界最優秀選手を受賞した。2000-01シーズンはリーグ2位で終わり、チームはタイトルを逃し、この時期にZIDANEの去就が騒がれるようになった。

2000年スペインのレアル・マドリッドの会長にペレスが就任すると、ZIDANE獲得を公約に挙げ、公約どおり2001-02シーズンに88億円で獲得した。この年、まず2001-02シーズン、これまで二度チャンピオンズリーグ決勝で敗れてきたが、ZIDANE自らの伝説のボレーシュートによるゴールによって、初のチャンピオンズリーグ優勝を果たした。リーグは3位にとどまった。日韓共催のワールドカップ2002では怪我のため、1試合の出場のみであった。2002-03シーズンはリーグ優勝を果たし、自身2度目のトヨタカップを獲得した。2003年にも3度目となるFIFA世界最優秀選手を受賞した。2003-04シーズンは、リーグ4位に終わり、カップタイトルも獲得できなかった。2004年ポルトガル開催のEURO2004に出場、2連覇をかけた大会であったが、ベスト8で終わる。2004-05シーズンもリーグ2位でとどまり、2年連続無冠に終わった。2005年2月の時点で「2007年にキャリアを終える」と語っていた。2005-06シーズンも無冠に終わり、2006年4月26日引退記者会見を開く。自身最後のキャリアとして望んだドイツワールドカップ2006は、低評判であったチームを決勝まで導いたが、延長に相手選手の挑発的な暴言に対して頭突きをくらわしてしまう悪夢の退場劇にて幕を閉じる。チームはPK戦の末、準優勝に終わる。ZIDANEの華麗なプレイとは対照的に、サッカーというものの厳しさと汚さを現実視される結末であった。しかしZIDANEは大会MVPに選ばれた。また2004年度にZIDANEは半世紀の欧州最優秀選手に選出されている。

(2) ZIDANEの人柄について

ZIDANEの人柄について竹谷(2006)での内容を中心に以下にまとめる。ZIDANEはフランスのマルセイユで生まれたが、両親がアルジェリア人であり、フランス生まれの血筋はアルジェリア人であるという複雑なアイデンティティのもとにあったことが予想される。父親は子どもたちが立派に成長するよう努めた。謙虚さや慎みを失わず、正直で勤勉な人間に育つこと、生涯をか

ける目標に出会うことを願っていた。両親の出身地であると同時にフランス旧植民地でもあるアルジェリアとの関係であるが、1954年～62年まで続いた独立戦争の傷跡は今も深く、政治的な問題が数多く残されている状態である。フランス生まれの2世たちは、両親の文化とフランス文化との狭間で、アイデンティティを持ってないでいた。フランス人の英雄としてZIDANEが認められた事実によって、自分たちのアイデンティティを見出すことができ、ZIDANEに絶大なる信頼を寄せていた。ZIDANEは「私の両親はアルジェリアの出身だ。私自身もこの国に親しみと友情を抱いている。でも、私はフランス人なんだ」と公言している。一方、ここ4、5年はチャリティマッチや恵まれない子どもたちを援助する慈善団体への助力など、慈善活動を通じて、アルジェリアに貢献している。現在は、フランス生まれのアルジェリア血筋という葛藤は、サッカー人生を通じてZIDANEの中では解消されていると考えられるが、自己を表現することが苦手であるという本人の性格に影響を及ぼしていると考えられる。一見穏やかな性格のように見えるが、敵のアグレッシブなマーキングに対しては、時として冷静さを失い、怒りのすべてをぶつけてしまうことが少なくなかった。それまで何の前触れもなく、突如として怒りだす場面がほとんどである。表現が苦手な人間の持つ特徴でもあるが、ZIDANE自身は「欲しい物を手に入れるためには、時に牙を剥く必要があります。私の怒りは主張だと思ってください（2003）」と語っているが、移民二世としての葛藤を象徴しているようにも捉えられる。

2005年の来日中に行われた新ユニフォームの発表会のワンシーンであるが、ラウール・ゴンザレス、デイビット・ベッカムの慣れたメディアへの態度に対し、ZIDANEにマイクが向けられると、パンツの裾をモジモジといじりながら、どこことなく居心地の悪そうな雰囲気漂わせており、カメラの前に立つことを得意としていない。一方、子どもが会場に現れると、とたんにその表情は柔らかくなる。その笑顔はとても自然で、優しさに満ち溢れていた。これは人情に厚く、家族を一番大切なものと考え、それが彼の全てだと言っても過言ではないところがある。ZIDANEは家庭的な人間で初恋の相手と結婚し、スキャンダルは一切なく、4人の子どもにも恵まれている。兄弟との絆も強く、会社を創設して経営を兄弟に委ねている。家族想いの人間性である。

ZIDANEは「サハラ砂漠の子どもたちのために」「この世界から貧困をなくすために」「難病に苦しむ子どもたちのために」「アルジェリア大地震の被災者のために」他、数々のチャリティマッチ活動を行ってきており、フットボーラーとしてできる社会活動に専念してきている。このことに関してZIDANEは「スポーツ選手として有名になれば、サッカーだけをやっているのではなく、社会的な問題にも何かしらの貢献をしていく義務はあると思う。私はロナウドと一緒に、国連を通じて、貧困に苦しんでいる人たちの救済活動をしている。私たちはサッカーによって多くのものを与えられた。だからその代わりに、社会に何かを返していく務めがあると思っている。」と語っているが、社会に対する感謝の気持ちや謙虚さ、また子ども好きや優しい性格を現している一面である。

自他からみたZIDANEの性格について、自身は「私は、普通の人間で、おとなしくて内気なタイプ。試合中は、その内気さは消えてしまうんだけど。」と語っている。ユベントス時代の監督であるマルチェロ・リッピは「人間的にもすばらしかった。謙虚で隠し事をせず、驚くほど控えめな青年だった。（2006）」と語っている。ZIDANEの一番の友人であるデュガリーは「ジズーは努力の人だ。つねに自己を超越しようとする。自分の思いどおりのプレーができないときや調子が悪いときのジズーは、とても苛立っていた。完璧主義者の一面があった。スタンドプレーには

走らず、いかに円滑に試合を進めるか、どうすればチームメートにベストなプレーをさせられるかを、いつも心がけていた。(2006)」と語っている。以上をまとめると、ZIDANEの人柄として、父親の影響を大きく受け、謙虚で大人しく、優しく誠実で、真面目な家族想いの人柄と、ピッチ上では妥協を許さない努力家かつ完璧主義者の一面を兼ね備えた人物と考えられる。

(3) 引退の決断理由

2006年4月26日の引退会見にて、「試合で勝った時は、いつもタイトルに想いを馳せ、勝ち続けることを望んでいたけど、2年前から、自分が描くイメージと実際のプレーがズレてきたんだ。3日ごとに試合をするのも厳しく感じるようになったし、このまま試合を続けていくこと自体、チームのために良くないと思うようになった。3シーズンもの間、何のタイトルも手にできずに終わってしまった。チームは調子が良いときと、そうでないときの波が激しくて、私自身も思い通りにプレーができなくなった。だから引退することにしたんだ。ここに来た時と比べて、一番の変化はフィジカルの状態だ。引退を決めたのも、最近の自分の身体から“悲鳴”が聞こえてきて、頭の中にまで響くようになったからなんだ。こんなコンディションでは、週に2試合も3試合もこなすのは不可能に近い。」と語っている。もう一つ、引退の理由を聞かれるたびに「自分の子どもたちに、父親としての役割を100%果たしたいんだ」と答えている。シーズン途中で会見を開いた理由として「最後のW杯に専念するためと、お世話になったリアルに来シーズンにむけて十分な補強の時間を与えるため」と語っている。

引退後について「リアルで子どもたちに関わる活動をしていきたい。何か教えられることがあるだろうからね。ただ、トップチームとは一線を引くほうがいいと思っている。監督のような仕事に向いているとは思っていない。子どもやスペイン系フランス人の妻のことを考えて、これからはスペインで生活するつもりだ」と語っている。

(4) 引退について考えられること

以上、ZIDANEのエピソードについてまとめてきたが、引退に至る現象や内的な実情について考察を行う。

ZIDANEは対談(2001)の中で、完璧主義者について「いつも自分の理想とする完璧さに欠けている破片を探す、そんな好奇心の部分が、実は一番面白かったりする。」と語っている。引退の理由として、自分のイメージと体との不一致からくるもどかしさ、さらに結果がでないチーム、またチームの不振を自分の納得のいかないプレーと結びつけて考えている。また現実的な問題として体力の衰えを挙げている。頭でイメージすることに対して、身体が動いてくれない。ZIDANEのプレーはスポーツというよりは身体を使った芸術と呼ぶにふさわしい域のものである。また内向的な性格は芸術家の気質でもある。芸術家が自分のイメージを表現する手段がない時やイメージと表現したものとの間にズレを感じる違和感を、ZIDANEは感じ始めていたのであろう。ZIDANEの芸術家的、かつ妥協を許さない完璧主義者的な部分があって、このような部分と現在の身体的な要因から来る不一致が年々積み重なっていたと考えられる。より高い質のプレーを展開してきたこともあり、プレーの質を落とすことや自分自身のプレーにストレスを感じてしまうことが増え、イメージと実際のプレーとの間に不一致を抱えたまま現役を続行するよりも、この状態で一区切りにした方が自分自身にとってもチームにとっても良いであろうと、この選択が好ましいという結論に至ったのだと考えられる。

またチームのことを考えて引退会見を早めに開くなど、本人の誠実で謙虚かつ、他を大事にする姿勢が現れている。フランスのもう一人のスター選手であったミシェル・プラティニは「内向的な性格は別としても、ジダン是非常に良くできた人間だと思う。プロ意識もすこぶる高く、家族思いの男だ。あれだけマジメでなければ、多額の報酬を返上してまで、レアルとの契約満了1年前に引退などしないだろう(2006)」と、家族というサッカー以外の大事にできる世界を持っている本人の強さであろうと思われる。ドイツ・ワールドカップ決勝における退場劇は、家族を想う気持ちがサッカーを上回ったこととしても捉えることができる。この引退を支える大きなこととして、家族への所属感の他に、ZIDANE自身、既に自分の性格を把握して、子どもに関わることが自分に資質にあること、一方、監督業には向かないことなど、自分なりのアイデンティティを確立しており、引退後、自分の進む道のビジョンを持っていたことも引退に対する不安を軽減することになっていたであろうと考えられる。

3. エピソードⅡ：中田英寿

(1) 中田のサッカー人生

中田のサッカー人生について河野(2006)を中心に以下にまとめる。表2に中田のプロフィールを示す。1995年ベルマーレ平塚に入団する。入団理由としては、上下関係のないチームであること、また海外留学を条件に盛り込んでいた。ベルマーレ平塚では、最初から先輩たちに質問の矢を浴びせまくり、議論になれば平然と強気の突破を試みていたという。先のビジョンと高い目標を自身に課せており、早くから海外でのプレーを考え、海外留学や語学の勉強などの準備を周到に積んできており、さらには国際大会をそのためのステップとして考えていた。理想とする目標が高く、人一倍の努力家であるが、一方で努力している姿を人に見られるのが嫌という人間であるため、「サッカーより稼げることがあれば、別にサッカーをやめてもいいです」などの発言を数々出してきた。反動形成的な防衛の持ち主とも考えられるが、高い目標のために努力をし、克服していくという点ではいい意味あいをもつ防衛であると考えられる。国際試合では、U-17ワールドユース大会ベスト8、アトランタ五輪はグループリーグ敗退であったが、マイアミの奇跡として語られているブラジル戦に1対0で勝利する立役者となった。1997年5月に日本代表にデビューすると、チームの中心に君臨し、日本を初のワールドカップへと導いた。ワールドカップ出場について「いろんな世界の人に会えるようになったってことかな。自分が知らない世界を知っている人と会って、いろんなことを勉強していく。俺、そういうのを人生の目標みたいにしてるところってあったから、ワールドカップ出場が決まってからの何日間ってというのは、ある意味、人生最良の時期、チャンスだったかもしれませぬね」と語っている。迎えたフランス・ワールドカップ1998では1勝も挙げられず終わったが、この活躍が認められ、当時世界最高峰のリーグであるイタリア・セリエAの扉を叩くことになった。1998年に自身の公式ホームページを立ち上げ、マスコミ対策にホームページから情報を発送することでプロサッカー選手としての整合性を保つ。1998年、1999年は2年連続でアジア年間最優秀選手に選ばれている。

セリエA・ペルージャでの1シーズン目は輝かしいスタートであった。開幕戦のユベントス戦では2ゴールを挙げ、一夜にしてイタリア国内で有名人と化した。1シーズン目は10ゴールを挙げ、2シーズン目の間には、優勝争いを宿命づけられたローマへと移籍を果たす。そこでは、イタリアのエースであるフラチエスコ・トッティの控えに回る日々であったが、3シーズン目

表2. 中田英寿 プロフィール

	1977年1月22日生	
	山梨県甲府市出身	
1995年1月	Jリーグ ヘルマーレ平塚入団	
1998年7月	イタリア・セリエA ヘルージャへ移籍	
2000年1月	同 ローマへ移籍	
2001年7月	同 パルマへ移籍	
2004年1月	同 ボローニャへ移籍(レンタル)	
2004年7月	同 フィオレンティーナへ移籍	
2005年8月	イングランド・プレミアリーグ ボルトンへ移籍(レンタル)	
Jリーグ通算	85試合出場	16得点
セリエA通算	182試合出場	24得点
プレミアリーグ通算	21試合出場	1得点
国際Aマッチ通算	77試合出場	11得点

の終盤の大一番で優勝を導く大きな活躍を見せ、セリエAの優勝を経験する。この地点で、日本の中田から世界の中田へと躍進を遂げる。そこから32億円の移籍金とともにパルマへ移籍する。2002年にはコッパ・イタリアで優勝するものの、監督交代後、起用法を巡って監督との間に確執が生まれる。この間、日韓共催のワールドカップ2002の出場、日本の絶対的支柱として、チームの決勝トーナメント進出に貢献する。この頃より、スター選手としての責任、重圧などが生じ、以前持っていた自由さや快適さは、失われつつあった。

起用法を巡って監督との確執から2004年1月にはボローニャへレンタル移籍、同年7月にはフィオレンティーナへ移籍する。当時、自身のことを「計算できる選手にはなったが、自由な発想がだいぶ消えてしまった。変なところで期待に応えようとしてしまっている自分がある。自由な発想を取り戻さなくちゃ」と語っている。2005年8月にはパルマ時代の監督がフィオレンティーナに就任したことをきっかけに、イングランド・プレミアリーグのボルトンへのレンタル移籍を行う。その後、ドイツ・ワールドカップ出場を決めるが、開催前より日本代表内での意思統一の上でのズレが顕著になる。W杯が開幕する2ヶ月前「好きで始めたサッカーだし、サッカーを通して色々な経験を積むことはできたけれど、サッカーに対して、いま純粋に打ち込めなくなっている自分があることも確かです」と語っている。チームはドイツ・ワールドカップ2006の予選リーグ敗退に終わる。その後、引退会見は行わず自身の公式ホームページにて引退宣言の文章を記載した。

(2) 中田の人柄

三浦和良(2006)が「すごく人懐っこい人間なんです。自分が持っていないものを持っている人間に、よく質問したりするしね。ほんとにメディアに対してもそうだったと思う。でもプロになってそういうところがうまくいかなかったのかもしれないし、あくまでプロサッカー選手としてドライに接したのかもしれないし。基本的にシャイだからね。」と普段メディアからは見られない面を語っている。中田はサッカーと正面から向き合い、海外を見据えて深く考えながら前進してきた選手である。現実主義者かつ完璧主義者で努力家、理論派で冷静沈着な面、好

好奇心旺盛な面と、人懐っこく、人に気を使える優しい面も持ち合わせている人柄と推測される。

(3) 引退の理由

記者会見は開いていないが、2006年7月3日、これまでと同様、自身のホームページから文章にて発信を行った。その内容からすると半年前から引退を決めていたとの事。プロサッカーという旅から卒業し“新たな自分”探しの旅に出たいこと。プロサッカーでは、期待や注目、責任などを背負わされ、時には賞賛を浴び、時には批判に苛まれる。責任を負って戦うことの尊さに、大きな感動を覚えながらも子どものころに持っていたボールに対する瑞々しい感情は失われていったこと、でもそれを守るために厚い壁を築くようにして守ってきたこと、日本代表に対して自分は伝えたいことがメンバーには最後まで上手に伝えることができなかったこと、などを語っている。

今後について、プロの選手としてピッチに立つことはないが、サッカーをやめることは絶対ないだろう。旅先で誰かと言葉を交わす代わりにボールを蹴るだろう、と語っており、引退後、世界各国を回る旅に出ている。

(4) 引退について考えられること

中田は、高年棒やチームから期待されること、日本のエースやパイオニアとして背負ってきた重荷などから、本来のサッカーを純粋に楽しむ気持ちを失ったことを述べている。また求められる役割と自分の志向するプレーや立場のズレによって、ここ数年は本来のイメージと自信を持っていた自分らしい納得のいくプレースタイルを見失ってしまっている。また周囲の期待に対して、自分のパフォーマンスが追いつかなくなってきたこともあるだろう。あるいはサッカーへの思いを守るためにここまで貫いてきた中田像に対して、本来持っていた自分像との相違に対して整合性を見出すことが出来なくなってきたのではないかと考えられる。また日本代表においても自分の思いが伝えきれないなど、本来人懐っこい性格の人間が他者と安定した関係を維持できないことは、心労が大きいことと予想される。以上のように本人が語らないであろう内面に抱えた様々な矛盾や葛藤に折り合いをつけられなくなってくることで、自身の中で一種のアイデンティティの混乱が起こっていたのかもしれない。そこで引退後のプランとして自分探しの旅をしたい、元々好きなことではあったが、まずは世界各国を回ってみたいと語っていることにつながるのではないかと考えられる。サッカーというビジネスや経歴や地位や現状の中で、自分らしさや自分の生き方を見失ったものを取り戻したい。また今の現状に限界が見えた上で新しい可能性を発見して、そこに努力して取り組んでいきたいという、そこには本人の前向きかつ現実的また好奇心旺盛な一面が現れていると考えられる。

4. まとめ

両者の引退に関するエピソードと要因についてまとめてきたが、両者とも中年期に入る前の体力的な衰えの要因は認められ、自分の思いと実際のプレーとのズレが本人に不全感を生じさせ、ストレスとサッカー選手としてのアイデンティティを揺るがす結果となっていると考えられる。そしてZIDANEにおいては、チームの不振と自分のパフォーマンスに対して、完璧を問う性格が大きな影響を受けており、引退への大きな要因となっている。中田の場合は、向上心と自分の生

き方を通す姿勢が、期待されて本来の自分を見失いがちになってきているアイデンティティと、向上していく上でのプロサッカー選手としての可能性が見えてこない中での新しい可能性探しに向けての引退として考えられる。このように体力的な衰えの次に性格と現在置かれている環境や内的心境などが引退の要因や引退の仕方に大きく影響していると考えられる。

サッカーをしていく中で、中年期に近づくにつれて体力の衰えからくるパフォーマンスの低下と、一方、それまで向上してきたパフォーマンスや経験から本人の中で作られるイメージは年々高くなっていく。つまり経験による自己イメージは脳の老化が進むまでは低下することはないため、イメージと身体との間に大きなギャップが生じる。ロジャーズ（1967）が心理的不適応の現象について、自己概念と経験の不一致や、自己概念と身体感覚の不一致を挙げているが、このイメージと身体とのズレも、ロジャーズのいう心理不適応理論に重ねて考えることができるのではないだろうか。もしそうであれば、この現象はプロサッカー選手としてのアイデンティティの混乱や危機を起こしかねない心理不適応な状態として捉えることもできる。これを解決していく方法として、プロサッカーを引退するプロセスを通じて、イメージと身体とのズレを受け入れることが、アイデンティティの危機に対して、適応していくことにつながると考えられる。そして、このアイデンティティの危機をうまく乗り越えるためには、他者のサポートやアイデンティティの再構築などが有効であると考えられる。ZIDANEは家族やチームの首脳陣からのサポートがあったり、子どもに関わる仕事合っているなど自分の特徴を理解していることや次の人生のビジョンがある程度できていたため、この危機を上手に乗り越えられるであろうと考えられる。

プロサッカー選手の職業期間は中年期の体力の衰えとともにやってくる。これは避けられないことである。そのため、プロサッカー選手の引退は早くやってくる。ZIDANEなど実績を残せた選手は将来の道はある程度保証されている。しかし、そうでない選手の方が何倍もいるため、引退は大きな社会問題としても考えられる。この危機を乗り越えていくためには、この引退の時期というものを自覚しつつ、準備を徐々にしていく必要があると考えられる。具体的には、サッカー選手以外の面での自己理解を促進すること、またそれを通じて将来のビジョンを確立していくことが必要となり、そのためのカウンセラーやソーシャルワーカーなどの専門職の導入が有効であると考えられる。

文 献

- 伊藤博編訳『ロジャーズ全集8：パースナリティ理論』岩崎学術出版社、1967。
神田橋條治『「現場からの治療論」という物語』岩崎学術出版社、2006。
河野一郎編『Hidetoshi Nakata, All Stories : Sports Graphic Number Plus』文藝春秋、September 2006。
河野一郎編『World Cup Germany 2006, The Undefeated : Sports Graphic Number Plus』文藝春秋 August2006。
岡本祐子『中年期からのアイデンティティ発達の心理学』ナカニシヤ出版、1997。
鈴木伸夫編『欧州サッカーを愉しむ。: Sports Graphic Number Plus』文藝春秋、October 2001。
鈴木伸夫編『欧州サッカーを愉しむ。総集編 : Sports Graphic Number Plus』文藝春秋、July 2003。
サッカーベストシーン編『ZIDANE : サッカーベストシーン2』コスミック出版、2006。
竹谷鋭編『ジネディーヌ・ジダン引退記念号 : WORLD SOCCER DIGEST』日本スポーツ企画出版社、2006。

付記

ZIDANEの華麗で芸術的なプレーを見られなくなることは筆者にとっても残念な事であるが、文章を書いている内に考えようによっては、今のZIDANEのプレーの高いイメージを持ったまま終わるというのもよいのではないかという思いが出てきた。これはこの文章を書くことで筆者の内面が動いてきた効果である。このまま現役を継続していくことによってプレーの質を低下することは喰い止めることはできないだろう。プレーの質は落ちてもイメージや映像は高いプレーのまま持続することができる。これは選手だけではなく、ファンにもいえることである。そのため、高いイメージが持続されている間に引退することは、ファンにとってもいいことかもしれない。とりあえずは長いキャリアを終えた労をねぎらい、多くの感動を与えてくれたことに感謝したい。